



「日本列島四季の花火」-②「満天の華散る夜空」茨城県 土浦市「土浦全国花火競技大会」 写真・文：泉谷玄作

「大曲の花火」と並んで、二大競技大会の一つ「土浦の花火」は、「割物」と「創造花火」、「スターメイン」で競う大会。私は特に「スターメイン」が好きで毎年楽しみにしている。内閣総理大臣賞も出ていて、参加花火師も多くなる。昨年大曲で 内閣総理大臣賞を獲得し、連続して土浦でも受賞した野村花火工業の地元である。毎年上位に入るには、並々ならぬ技術と創造力が必要だろう。かつて、「カラス」とさげすまされていた花火師は、現在日本一の座についている。

韓国オツギ祝祭

会長 菅原 三朗

全国肢体不自由児者父母の会連合会（全肢連）と韓国脳性マヒ福祉会は、1983年に、民間の障害者団体として先駆けとなる姉妹結縁を締結して以来今年で24年目である。

両団体はこれまで毎年、障害者及び家族の方々の相互訪問などを通じて、親善交流をはかるとともに障害児者福祉向上のための研鑽の機会として活用され、国際障害者年における「完全参加と平等」を目指した、多くの歴史を共に歩んできた。韓国脳性マヒ福祉会が毎年行っているオツギ祝祭「オツギ」とは日本で言う「起き上り小法師」のことで底におもりをつけた達磨の人形で倒してもすぐに起きあがる。これは韓国で重度の障害児の「愛稱」としての呼び名である。今年で第24回目のこの祝祭は重度の障害児者と父母の、

リクリエーションを兼ねた全国大会である。このイベントに全肢連からの訪問団として、今年は東北ブロックから20名の親子が参加し私も訪問団の団長として同行した。

9月23日の「オツギ祝祭」当日は晴天に恵まれ、ソウル市内漢江市民公園の会場にはバスや自家用車などで全国各地より約2,000名の親子と多数のボランティア福祉関係者などが参加。警察音楽隊の国家演奏にはじまり関係者のあいさつとあと功労者表彰などが行われた。私も全肢連訪問団を代表して祝辞を申し上げた。

やがて特設の舞台では各地区のグループごとの歌やおどりなどの芸能発表や寸劇などが次々と披露され、障害にもめげず一生懸命に発表する姿には、しばしば涙する場面もあった。やがて我々全肢連訪問団にも指名があり、全員用意の半天姿で秋田の「ドンパン節」をおどった。続いて「星影のワルツ」を歌い拍手喝采をあげた。そのあとはプロの女性歌手の歌などもあった。最後はまた当

日の発表に対する審査結果による表彰が行われフィナーレとなった。

「オツギ祝祭」は今年で24年も続いているという、時代が変化していくので長く続くことが必ずしも良いかどうかは別として、あの熱気とエネルギーには圧倒される思いであった。日本では障害児者の親子が一緒に参加するこのような大規模な催事はない。

今、日本では社会の変貌に対応する構造改革が進められ、障害者福祉も多様化するニーズを踏まえながら、障害者の自立と地域生活への移行が推し進められ、今年4月からは「障害者自立支援法」が施行されるなど制度や施策も急激な改革が続いている。しかしこれには生活基盤である所得保証がされないまま応能負担から応益負担が導入され、障害者や家族に大きな負担を強いるものであり自立支援とは逆行するとの批判もある。

旧態依然のような感じの「オツギ祝祭」を観て、改めて障害児者福祉の原点とは何かを考えさせられた。

次期参院選候補者に佐藤のぶあき氏を推薦 平成18年度第2回理事会

県協会は9月14日、秋田キャッスルホテルにて平成18年度第2回理事会を開催した。

会議では、常置委員会の開催結果、上期事業の報告がなされたほか、第21回参議院議員通常選挙（比例代表）の候補者として、佐藤のぶあき前国土交通省事務次官を推薦することを決定した。

また、秋田県の入札契約制度における失格基準導入後の入札についての調査結果を説明（平成18年4月1日から8月31日：失格5件）。菅原会長は「失格判断基準を導入し、失格ケースが出たことには、一定の評価



をるところではあるが、落札率から見ると相変わらず低価格受注が続いている。もう一步踏み込んだダンピング対策について県当局へ働きかけをしていきたい」と述べた。

建設業は胸を張って 佐藤のぶあき氏講演会

9月26日（火）、佐藤のぶあき氏（前国土交通省事務次官）が来秋、秋田ビューホテルにおいて講演会を行った。

佐藤氏は昭和22年新潟県生まれ、昭和47年に建設省（現 国土交通省）に入省。道路局長、技監を歴任し、平成17年に事務次官に就任。今年7月に国土交通省を退官し、来年の第21回参議院通常選挙（比例代表）に向け活動している。講演会に先立ち、佐藤氏は（社）秋田県建設業協会 菅原三朗会長並びに秋田県建設青年協

議会平野久貴会長から推薦状を受け取った。

講演にて、佐藤氏は「建設業は地域の除雪や防災などを担っているいわば『民間国土防衛隊』ともいう存在。もっと胸を張ってもよい」と業界を激励。入札契約制度にも言及し、公共調達において価格だけの競争をしているのは日本だけであり、技術・品質を合わせた総合評価方式が重要であると述べ、また、制度を実情に則したものにするため、業界と官僚と一緒に考えていく必要があると強調した。

佐藤氏は、年内に再度来秋する予定となっている。

平成18年度 安全パトロール

日本アスファルト合材協会東北連合会（加藤義光会長、以下日合協東北連合会）は9月14日、平成18年度安全パトロールを実施、秋田県アスファルト合材協会会員企業より15名が参加した。

日合協東北連合会では毎年パトロールを実施しており、9月6、7日に福島、山形、13日に宮城県、9月27、28日は青森、岩手と東北6県のアスファルト合材工場各2カ所を訪問。今回秋田県では湯沢アスコン共同企業体（湯沢市）、六郷アスコン（美郷町六郷）の2カ所を対象にパトロールが行われた。

参加者は、日合協東北連合会のパトロール班と共に場内を巡回し、安全衛生管理体制、場内設備の安全対策などを中心に点検。終了後の検討会では点検結果を精査し、改善事項等を指摘。

また、良好な点などを挙げ、参加者は各自の工場の業務における参考とした。



若年建設従事者 座談会開く

経営者・上司とのコミュニケーションが魅力ある職場づくりに繋がる

県協会では、平成18年8月29日（火）秋田ビューホテルにおいて、若年建設従事者座談会を開催した。同座談会は依然として建設業を取り巻く厳しい現状の中、近年の建設投資の減少、若年者の定着率の低下、2007年問題を控え、技術の継承についてどう対処するかを、これからの建設業を担う若年技術者による意見や要望などをまとめ広く会員企業等に反映させることを目的に開催された。

各支部から推薦された若年技術者・技能者15名が参加し、座長に高橋庄四郎氏（秋田経営者協会専務理事）、

助言者に八重樫學氏（（社）秋田県建設業協会経営委員長）を迎えた。

座談会に先立ち、秋田県建設交通部建設交通政策課の加賀屋 建一政策監が「秋田県の社会資本整備関連施策の概要」と題して講演。公共事業費の推移と見通しについて説明した上で、「今後は民間へのPFI手法が増え、新規の事業が減り、更新・維持管理の仕事が増加すると思われる。今後はデザインビルドやVE方式、プロポーザル方式が主となる方向へもっていきたい」と述べた。

座談会では、建設業協会活動、自



社の経営、自分の仕事・生き方、これからの建設業界発展等について意見交換をした。

座談会の主題は「これからの建設業を担う」副題として▽魅力ある職場づくりについて▽技術の習得・継承について▽将来の建設業発展のために、などのテーマに沿って進められた。

この中で、魅力ある職場づくりについては「世代間のコミュニケーションが快適な職場づくりに重要」、技術の習得・継承については「自分に向上心がないと勤まらない」の他、「スキルアップの為に職場の先輩や経験者から知識を得るのに重きを置くのが現場の快適化にも繋がるのではないか」という意見も挙げられた。

また、助言者からは、「会社が取り組んでいることを何故、どのような目的でやっているのか経営者に聞き、お互いに理解して模索していくことが必要」との見解も示された。

アスコン塊の再利用を要望

秋田県アスファルト合材協会（加藤義光会長）は、現在、再生アスファルト混合物の原料となる再生骨材生産に必要な発生材（アスファルトコンクリート塊、以下アスコン塊）が不足していることから、発生材をアスファルトプラント併設の産業廃棄物中間処理場へ搬入されるよう、9月初旬、秋田県建設交通部を始め、県内の国土交通省各河川国道事務所へ要望活動を行った。

アスファルトプラント併設の産業廃棄物中間処理場では、搬入されたアスコン塊を破砕し、再生骨材を生産、再生アスファルト混合物の原料としているが、現在、地域により偏在はあるものの、全体としてその搬入量は減少している。また、同処理場へ搬入されないアスコン塊は路盤材へ利用されるなど、表層からの発生材が表層へ再利用されないなど資源のリサイクル・リユースの観点からも問題となる。

9月4日、加藤会長は秋田県建設交通部を訪問。大嶋直樹建設交通部長以下執行部へこうした現状を訴え、公共工事に当たりアスコン塊の取扱処分に関してはアスファルトプラント併設の産業廃棄物中間処理場への搬入▽「リサイクルの質」の観点からアスコン塊をアスファルト混合物へ優先的使用を要望した。

その他、県内の国土交通省各河川国道事務所へは▽9月6日（秋田）▽9月15日（湯沢）▽9月16日（能代）と同様の要望を行っている。



土木建築の

近代化遺産

No.51

旧金子家住宅

秋田市大町1丁目3-31



秋田市の大町や茶町は藩政時代、藩から家督を許された商家が立ち並ぶ町人町の中心であった。基本的に江戸時代の商家は近代化遺産の範疇に入れないが、この金子家は明治十九年（一八八六）、秋田町（秋田市）の大半を焼き尽くした俵屋火事で焼失し、翌二十一年に建てられ、昭和五十七年までこの地で商いがなされた旧家の代表として取り上げた。

平成八年、所有者の金子家から秋田市に寄贈され、翌九年に江戸時代後期の伝統的建物として秋田市の指定有形文化財となった。建物は主屋一棟、土蔵一棟からなる。木造二階建て、切妻造り、鉄板葺き（元は古羽葺き）。間口四間、奥行十五間というのは藩政期、商家に許された大きさで、総面積は約九十六坪（三一六・五四平方m）である。

ると、通りに並行した小店という土間通路がある。これは冬期間、雪を避けるアーケードのようなもので、立ち並ぶ商家の軒先に連続するものであった。通り土間は四間の間口から奥まで続くもので、その横に店や中の間、おえ（居間）、台所などの各部屋が続いている。その奥、広い土間を境として土蔵がある。土蔵は主屋と鞘屋根でつながっており、壁は黒漆喰で化粧されている。土蔵の出入り口には二重の引き戸と漆喰の扉がつけられている。

また、屋根の上にある二個の天水甕は防火用のもので、昭和八年に秋田を訪れたドイツの建築家ブルーノ・タウトも興味深く観察している。

現在、隣接する秋田市民俗芸能伝承館の管理運営となって一般に公開されている。

（取材・構成／藤原優太郎）

情報コラム Vol.6

継続学習制度「CPDS」

CPDSって??

CPDSとは、(社)全国土木施工管理技士会連合会が実施している継続学習制度で、CPDS加入者が土木施工に関する講習会等に参加した場合、そうした学習の記録を残し、必要により学習履歴を証明するシステムです。

どのように活用するの?

品確法の施行以来、発注者の間で技術力の向上に資する技術者を適切に評価する傾向が強まっております。CPDSを入札参加資格審査や、総合評価落札方式への評価項目に用いているケースがあります。その際必要となる、技術者の学習履歴証明書を発行することになります。

秋田県は?

東北地方整備局や、秋田県においては今のところ評価の対象とはなっておりませんが、東北では、宮城県が総合評価落札方式の評価項目に加えております。

詳しくは(社)全国土木施工管理技師会連合会HPをご覧ください。

<http://www.ejcm.or.jp/index2.html>

どうして日本は こうなってしまったか —負の原点—

菅 礼子

1990年という今から16年前になるが、ある団体旅行にあって延べ11日間、アメリカ合衆国を旅したことがある。

デトロイトで入国査証を受け、ワシントンD・C—ニューヨーク—サンディエゴ—ティファナ（メキシコ）—ロスアンゼルスと各地を巡り、行く先々で識者の話を聴く機会を得たが、その折々の感想をひっくるめて言うと、“アメリカは変わった！”ということだった。

つまり、かの音楽映画“ウエストサイド物語”の中でペルトリコからやってきた娘達が—♪言うことないわ…わたしはアメリカが好きよ、なんでも自由、買い物はカードでOK…キャデラックが走り、産業は盛ん…楽しく暮せるアメリカ♪と歌いまくり踊りまくるが、1990年に訪れたアメリカはそこに謳いあげられている楽しく暮せるアメリカとは全く様相が変わっていた。

上院議員の講演、大学教授の講話、その他行先々で聴かされたのは等しく“どうしてアメリカはこうなってしまったのか？”という言葉であった。

巷には失業者、ホームレスが溢れ、凶悪犯罪が多発、家庭の崩壊、青少年の麻薬禍、特に青少年層の犯罪の低年齢化が著しいという。—あいつの着ているTシャツの色がきにくわねえ—ただそれだけの理由で即、銃で撃ち殺すという、信じられないような自己中心の殺人等の諸状況をフロリダ州立大学のリチャード・ルビンスティン教授は列挙したのち「今や、人びとの心の中には、神を恐れるということが無くなっている、アメリカの為政者は“神との契約”を原点とした建国の精神に立ち返るべきだ」と述べた。

亦、某上院議員は私達日本の旅行者を前にして「今のアメリカ社会のモラルの低下、悪質犯罪の増加、これらの状況はとりもなおさず今から十数年後の日本の社会の姿である。そして更にその十数年後には、日本に追いつけ追い越せの韓国の姿となるであろう」と予言した。この日本の未来像に対する米国上院議員の推測はビタリと的中してはいまいか…

実は、この章は、平成15年8月1日付（第1112号）の本紙に1度「数学的言語？」と題して掲載した内容と重複する部分があるが、あれから3年、悪化する一方の日本の社会の現在に改めて視点をすえてみようというのが筆者の意図である。

今、私達の眼前に展開する日本の社会—富裕層は豪壮な邸宅に住み、一千万円近い車を購入する等その豊かさを謳歌し、低所得層は苛斂誅求ともいうべき高額の税に喘ぐという格差社会を生み出し、ホームレス・失業者は巷に溢れ、親が子を殺し、子が親を殺す。あるいは友が友を、無頼の徒が抵抗力のない幼児を拉致、弄んだ後に殺す。

エレベーターは開かなくなり、ストーブや給湯器で死者が出る。高層ビルやマンションの建築は、構造設計の段階で建築資材の省略をはかって儲けに走る。それがいざという時、そのビルを高額で購入して住む人々の生命にかかわるということなどは少しも勘定に入れていない。粗雑な技術そしてモラルの欠如！

—どうして日本はこうなってしまったのか—

かつてのアメリカの識者たちの嘆きはそのまま今の日本にあてはまるのだ。どうしてこうなってしまったか？についてアメリカのルビンスティンは神を恐れるところの喪失をあげたが、しかし、ではなぜ“こころ”が喪われたかには言及していない。

越智通雄氏の著書『英語の通じないアメリカ』に因れば、“その原因は機能化された物質文明であり、それら洗濯機・テレビ・掃除機果てはコンピューターを産出した“数学的言語”

である。パスポート・診察券・預金払出しカード・買い物カード・携帯電話それらは皆、いつのまにか、私達の背後に構築された数学的言語による高度管理化社会の産物なのだ。

そこには“こころ”の領域と要素はない。つまり、カードさえあれば、担当との会話を経ずとも、コンビニなどで、保険金、電話料、水道料、電気代などの振りこみ、住民票も得られる。そこで交わされる「今日は寒いね」「ありがとう」などの日常会話はなくなり、人間は次第に無機質になって行く。モラルとかヒューマニズムなどは通用しない。ただ、殺すか殺されるかの世界になってしまうだろう。麻生さんというひとを、私はその風貌、独特の“麻生ブシ”とも言える語り口をつねづね好ましく思っているが、先のテレビインタビューに於て「日本のIT産業は今やその技術力による最速、しかも最低廉の価格で世界一に躍り出ている」と言われ、亦、別の日に、総理候補者お三方によるそれぞれの“教育改革”について意見を述べられていたが、お三方も（この稿が出る時にはすでに総裁は決まっていようか）質問側の記者諸君も、これまで述べた物質文明が今日の諸悪の根源、人々の“こころ”の荒廃という負の原点になっていることに気づいておられるだろうか…

「ワープロができますか？」というテレビ局側の質問に対して、疑似就職運動者（ニート）として出演した辰巳琢郎氏（京大卒）が「少しは打てるが、しかし私はそういった機器にふりまわされたくない」と答え、独自の物質文明の批判ともいえるべき意見を展開されたのは、まさに一掬の清涼水だった。しかもそれに対して「それでは就職はできない」というのが司会者の答えだった。現社会においてはたしかにそれが真実であり、現実ではあるのだ。

ただ筆者は、やみくもに科学の推進、産業興こしに反対するものではない。

光ファイバー（東北大学教授・西澤潤一氏）トロン計画（東大坂村健教授）—一般にワープロ等の機器はアメリカ産のマイクロソフトが使用されているがトロンは自動車の制御装置その他に使われている。世界をリードする日本の科学者たちの目覚ましい活動は、別の意味での活力を日本の社会に与えていると思うのだ。

以前、“東北会議”で西澤氏に接したことがあるが、これはその時、西澤さんが語られた話である。

西澤さんは受験した仙台一中（旧制・現仙台第一高校）に落第、二中に入った。その時思ったそうだ。「ピリを走っていても、ぐるりと方向転換すればトッパだ—」科学の推進にしても、日常の生活にしても、この発想の転換が氏の原点となっていることは間違いないと思う。

子を育てる親・競争社会にスピアウトされまいとする一般社会人や学生たち、あるいは利益追求の事業家、過疎化に喘ぐ市・町・村の為政者たち、そして日本をリードする識者たちも、こういうのびやかな発想転換のできる社会土壌の育成がのぞましい。科学による便利な豊かさの追求とそれらの原点としてのこころの尊厳をどう人々に着地させるかが教育基本法の最重要課題だと思ふ。

秋田は人口、経済基盤その他で全国最下位に位置しているが、西澤式発想の転換をすれば、緑の資源に恵まれ、空気は澄んだその自然環境においてトッパとなる。それだけではない。

その昔、ドイツが秋田の小坂鉦山に最新の機械を輸出するにあたって、前もってその仕様書を送っておいたところ、長い航海の末に、揚陸された機械を、狭い田舎道を馬の背に乗せて運び、いざ据えつけの段に至って、あらかじめ小坂鉦山側が送られた仕様書によって作っておいた台座に、それぞれの機械が一センチミリの狂いもなくビタリと収まって、機械と共に派遣されたドイツの技師ハーグマイヤーに—こんな草深い田舎の鉦山が—と舌を捲かせた（ハーグマイヤー著・『小坂への旅とそこで滞る』（秋田飯島製錬所蔵）に拠る）という。

秋田は豊かな自然環境に恵まれているばかりでなく、高い良心的・知的感覚と技術力の伝統がある—ということ、日本復元力の原点としたいというのが筆者の希いである。